

ぼん・ぼり通信 創刊号

発行者 宮川眞一・みちよ・りの 発行日二〇〇八年九月一日

はじめに・「ぼんぼり通信」は、私たち宮川ファミリーの生活の様子や、この三年間の中で、「おどろいたこと」「学んだこと」などをまとめたものです。お好きなどころから気軽に読んでください。

生活編

チャンドラゴーナの病院

バングラデッシュの第二の都市チッタゴン。そこから、北東に車で2時間ほどずすんだところにある小さな町、チャンドラゴーナ。バングラデッシュではめずらしい山がみられ、少数民族の人達も沢山すむ場所です。その町に百年前から病に苦しむ人々を支えている病院、クリスチャン ホスピタルチャンドラゴーナ。この病院が私たちの生活の場所でした。

こんな家に住んでいました

病院の敷地内にある、コの字形の建物の一角に住んでいました。2階は、病院にお客さんが訪れた時に利用されるゲスト・ハウス、隣には病院のスタッフ3家族が住んでいます。応接間とキッチン他に、寝室が全部で3つ、外には庭があり縁に囲まれた広い家でした。

オムツから冷蔵庫まで、 なんでもそろう(?)町の市場

病院の門をでると、細い道を挟んでお店がずらっと並んでいます。ここがこの町の中心「ドバシ・バザール」。薬屋さん、文房具屋さん、生地屋さん、金物屋さん、電気屋さん、電話、ファックス屋さん、靴屋さん、貴金属店等々、ところせましにならんでいます。数は沢山ありますが、よく見ると品揃えがほとんど同じお店が何軒も続いているのがバングラデッシュらしい。

通りからすこし横道に入ると、野菜や、肉、魚等が買える「カチャ・バ

ザール」(フレッシュ・マーケット)があります。生活に必要な最低限のものはほとんど手に入ります。しかし、多くはチッタゴンから運んでくるので、値段がすこし割高で、品物もあるときとないときとムラがあります。

休みの日にはこのドバシ・バザールで代わり映えしない店を、見たあと、お茶屋さんで、くつろぐのが私たち夫婦のささやかな楽しみでした。

「お手伝いさん症候群」

私たちの家には、「オニール」という、男性のお手伝いさんが働いていました。四十歳のヒンズー教徒で、私たちの家から歩いて三十分ほどはなれたヒンズー教徒が多く住む「ヒンディーパラ」(ヒンズー村)から週六日、朝八時から夜八時まで働きにきていました。彼の仕事は、掃除、洗濯、買い物、料理と、家事全般。まさに主婦いらず!

お手伝いさんのいる生活はステキに聞こえますが、実際は慣れるまでが大変でした。この感じ、思いつくのは「ちよつとできの悪いお嫁さんがきた姑さんの気持ち」。姑になつたことはありませんが、(笑)。自分の城だった場所が、他のだれかの手によつて変えられていく、ちよつと居場所をとられてしまった感じ。一から色々と教えなければいけない

わたしたちの3年間

- 2005年9月 バングラデッシュへダッカで語学勉強。
- 2006年5月 チャンドラゴーナへ病院での生活がスタート!
- 8月 日本へ一時帰国
- 2007年4月 みちよ 出産のため、日本へ
- 7月 娘、理希(りの)日本で誕生
- 12月 みちよ&りの(4ヵ月)バングラデッシュに戻る
- 2008年4月 初めての家族旅行シンガポール
- 7月 りの 満1歳。
- 2008年9月 無事任期がおわり帰国

という責任感と、あまり口うるさくいつて嫌われたくないという気持ちとの板挟み。他にも、見知らぬ男性が家の中にいつもウロウロしている、ということに慣れるのに時間がかかりました。

でも、慣れというのは恐いもの。今では、すっかり何でもまかせられるようになったオニール。

「毎日来てくれればいいのに・・・。」と思わずつぶやいてしまう私。すっかりお手伝いさんなしでは生活できない「お手伝い症候群」になつてしまつたようです。

今後、バングラデッシュに住む予定のある方、お気を付け下さい。お手伝いさんがいたとしても、たまにはコップくらい自分で洗ひましょう！禁断症状はつらいですよ。

おもしろい風習編

「地震がきたら外にとびだせ？」

地震がほとんどないバングラデッシュ。しかし、私たちがいた3年間、2回ほど、「どきっ」とするような強い揺れを感じたことがあります。

気になるあの値段、この値段！

チャンドラゴーナでの値段です

お米 1kg	60円
小麦粉 1kg	104円
卵 1ダース	160円
ニワトリ 1羽	280円
ジャガイモ 1kg	50円
お茶屋さんでお茶を一杯	10円
お手伝いさんの日給	300円
電気代 (1ヶ月)	1000円

した。そのとき、あわててテーブルの下に逃げたわたしを見て、周りは大笑い。

理由を聞くと、バングラデッシュの家は、崩れやすいので、まず、家の下敷きにならないよう、外に飛び出すように教えられるそうです。そう言われてみれば、ダッカのような都会では話は変わつてきそうですが、チャンドラゴーナのような田舎ではたしかに田んぼが広がる外の方が安全そう。ということのみなさん、バングラでは地震がきたらまず、外です。お間違ひなく！

「なんでもかんでも匂いをつけろ！」

〜香り大国バングラデッシュ〜

ベンガル人は香り好き。香りは身だしなみのひとつ。市販のシャンプー、化粧水、ヘアジェルなどにももちろん、香りの着いたティッシュペーパーは一般的。香りのないのを見つけるのは一苦労。

「なぜわざわざ香りのないティッシュを？」と、お店のおつちゃん不思議そうな顔。なんだか、わざわざ炭酸のぬけたコーラを探しているような、理不尽なことをしているような気分になります。しかしあの濃厚な香りのティッシュで鼻をかむとよけいに鼻がムズムズするのは私だけじゃないはず。

もうひとつ、強烈な香りを放つのは紙おむつ。

日本では赤ちゃんの物にあまり強い香りは使われませんが、こちらでは関係ないようです。おかげで娘は強烈な残り香を漂わせながら家中をどきまわっていました。

しかし、香りは記憶力とつよい関係があるといわれます。バングラデッシュのパンパースの香りをいつしか娘が嗅いだら、ふと、なつかしい気分になるかもしれません。そういう

う意味では香るおむつも悪くないかも？

「鼻づまりに、ニンニク？」

〜バングラ流 自然療法〜

バングラデッシュに在る間に私たちが出会った、自然治療法を紹介します。

娘が6カ月の頃、カゼをひきました。鼻水がとまらず、苦しそうなときに教えてもらったのがこの方法です。

- 一、マスタードオイル(10ml)と、すりつぶしたニンニク(ひとかけら)を用意する。
 - 二、一緒にまぜて火にかけ、よく熱する。
 - 三、人肌ほどの温度に冷ましたら、鼻の下、むねにすりこむようにぬります。
- これで鼻もすっきりよく眠れます！

もうひとつは、あせもができたとき、肌トラブルがある場合におすすめなのが、

「ニームの葉っぱ」。

・ニームという植物の葉っぱをとり、鍋で水からよく煮だします。お湯が濃い緑色になったら火を止めます。

・その煮汁をガーゼにしみこませて、悪い部分にあてたり、そのまま風呂に入れて入っても効果的です。

普段からも入浴剤のように使えます。これでお肌もトラブル知らずです！

子育て編

娘を連れてバングラデッシュへ戻ると、またひとつ新しい発見がありました。この国はみんな子ども好き。身内だけではなく、となり近所や、通りがかりの人まで、こどもたちを、温かい目で見守っています。こども達が遊んでいて、泣き声が聞こえると、近所の人

が窓から顔を出し「仲良く遊びなさい！」と声をかけます。悪さをしていると、通りすがりのおじさんが、「こらーやめなさい！」と叱ります。

また、娘をどこに連れて行っても、迷惑そうに顔をせず、「おいで、おいで」とみんな笑顔で迎えてくれ、私も安心して娘をつれて歩くことができました。

娘を連れて歩いてみるとよく聞かれたのがこの質問。「この子は誰の子？」。

たしかに私が「お多さん」「は何歳？」と、母親らしき人に聞くと、「私の子じゃないの。」と返事がかえってくるのが度々。

その人は叔母や、姉、従姉妹、近所の人だったり様々。

実に様々な人達が協力してこどもの面倒をみていることが伺えます。

私達もよくわかりませんが、一昔前の古き良き日本はこんな感じだったんじゃないかな、と思います。大人が他人のこどもを叱るのも、自分のこどもだけではなく、この国の大人として、国のこども達を守って、立派に育てよう、という大きな責任感を持っているからでしょう。親だけではなく、遠い親戚も、となり近所も社会全体でこどもを大切な財産として、見守って育てているバングラデッシュは、**遠くまで感じます。**

土曜日出生まれは出遅れる

バングラデッシュの言い伝えでは、土曜日に産まれた子（とくに女の子）怒りっぽくて、気性が激しいといわれています。嫁にはもらわないほうがいいと言われてしまうので、わざわざその曜日をさけて出産しようという人も少なくないとか。さて、娘はまさにその、土曜日出生まれ。「やっぱり」と、言われないよ

うにおしとやかに育てているつもりなのですが、どうなることやら？

「逃げろ！おばさんが棒もっておいかけてくる！」 バングラの「こどもの遊び歌」

バングラデッシュで教えてもらったこどもの遊び歌を紹介します。

タイ タイ タイ
ママ バリ ジャイ
ママ ディロ ドド コラ
ベット ボレ カイ
マミ エロ タンガ ニエ
パライ！ パライ！ パライ！

訳： ハイ ハイ ハイ
おじさんの家にいった。
ミルクやバナナをたくさんくれて、
お腹がいっぱいたべたよ。
そしたらおばさんが、棒を持っておいけてきた
逃げろ！ 逃げろ！ 逃げろ！

ここで「おじさん」[ママ] というのは母親の兄弟で、「マミ」はその奥さんのことをいいます。おじさんは血がつながっているのかわいがってくれるが、血のつながりのない奥さんはかわいがってくれない、という歌です。この国の血のつながりを大切にする文化がよく表れている歌です。

娘はマルマ族？

チャンドラゴーナは少数民族の人達がたくさん住む地域です。顔は私たち日本人にとっても近いので親しみを感じます。その少数民族の中でも、顔の特徴がちがうそうです。

その中の「マルマ族」の顔ににているそうです。ちなみに眞一はチャクマ族、みちよはりのと同じくマルマ族顔らしいです……。

「ぼんぼり」の意味

娘にはふたつあだ名があります。

まずは「ノディ」。これはベンガル語で「河」という意味。まだ、娘がお腹の中にいる時に、私たち夫婦が響きがかわいいのでつけました。このあだ名が「バングラの名前」として、るのが産まれた後、も、みんなで呼んでくれました。

もうひとつは「ボン・ポリ」。この「ぼんぼり通信」の名前の由来でもあります。意味は「むつつり顔」。いつも不機嫌そうにムツとしているひとをこう呼ぶそうです。なかなか笑わずちよっとうたぐり深く人を上目づかいに見ている娘の様子からつけられました。

その娘は最近、「ボン・ポリ」と呼ばれるとニヤリと笑い、脱ボン・ポリ化を目指しているようです。

やっちゃんいました！

バングラ流ホームパーティー

「そろそろこの病院からしばらく離れるし、お世話になった人たちを招いて食事会でもしない？りの誕生日会も含めてさ」と、後々、あんなすごいことになるとも知らず、この気軽な一言がきっかけ決まったパーティー。

この国で 度々結婚式や、こどものお祝い事などで招待を受けていた私たち。漠然としたイメージをもって、お祝い事に詳しいスタッフに相談。

「何人呼びたいの?」「全員」「じゃ、3000〜3500人だね。」「!」「料理は?」「カレー。出来たら2種類。飲み物もソフトドリンク用意したい」「場所は自宅なら表にテントをはろう」「テント?」「80人くらいは一度に座れるから。」「!」「費用は大体6万タカ(12万円)もあれば足りるよ。」「!」「!」「といった具合であっけにとられながらも、話はどうも進み予算も少し低くしてもらい訪れたパーティー3日前。

4メートルほどの長い竹を沢山リアカーに乗せたおじさん4人が登場。手際よく竹を組み合わせテントの骨組みを建てていく。運動会などの簡易テントを想像していた私達はその大きさにびっくり。雨が降っても濡れないように屋根も張り、柄付きの布で覆って、夜には立派な会場が出来上がっていました。そしてパーティー前日。大人ひとりすっぱ

～習い事～

みちよの場合



インド/パングラデッシュの伝統的な打楽器「トブラー」を習っていました。パングラデッシュの曲にあわせて軽快なリズムで独特の存在感のある楽器に魅せられ習いはじめて早2年。目標はパングラデッシュでトブラリストデビュー!?

～習い事～

眞一の場合

パングラデッシュの伝統的な踊りを習っていました。週1回、2時間あまりのレッスンに度々休憩までががんばりました。今では3曲、自信を持って踊れるように。病院の100周年記念にゲストの前でも披露した踊りも披露しました。

り入る大きさの鍋がゴロゴロと庭に運び込まれ、コックさん達が6、7名がやってきました。聞くとき夜通し準備をするとのこと。何処で寝るかとか聞くとき「ここで。」なんと、うちの庭で野宿らしい。すごいことになったなとふたりでそわそわ。

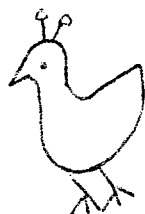
夜八時頃になるとなにやら外が賑やかな。恐る恐るカーテンの隙間から覗くと何十羽もの生きている二ワトリが庭中に!明日のメインディッシュだ。二ワトリの鳴き声をBGMにちよつと罪悪感を感じつつも就寝。

そしてパーティー当日。本当に彼らはまだいるんだらうかとカーテンを開けるとあの魔女の鍋がグツグツあつちこつちでフル活動。二ワトリ達はすっかり鍋の中に収まっていた。そこにウエイターさんたち登場。ひとつのテーブルにつき1人配置される。手際よくテーブルのセッティングが行われ、あつという間に7つのテーブルがきれいに準備された。全部で94人座れる。お皿、コップ、手を洗う石けん、洗面器など、すべて持ち込みで用意してくれる。

一二時には近くのお店で注文したケーキが届く。夕テ、ヨコ50x50くらい大きなケーキ。おめでとうのメッセージの横になにやらアンバランスな謎の鳥のイラスト。周りを彩るバラの花や葉っぱは食べ物ではあまりみかけない蛍光色だ。怪しい。

こうして迎りにカレーの香りが充満するか、午後一時にパーティー開始。みんなで「ハッピーバースデー」を大合唱。そしてロウソクを吹き消し、ケーキカット。まず娘にケーキを一口。しかし、見事なイナバウワで食べるのを拒否。次に親がお互いに食べさせ合うようにいわれ、結婚式か!と、つつこみたくなるのを押さえ一口。ん、まずい!あれだけ嫌がるのは、娘の味覚は正常に発達している証拠だ。

その後、みんなにもケーキをふるまいおおいに盛り上がり午後四時には無事に終了。夕方6時にはテントの跡形もなくすっかり元通りになっていた。さすがホスピタリティの国パングラデッシュ! その職人技に脱帽でした。



↑ ケーキに匹敵するおいしさ

最後に

私たちがこうして無事に3年間、パングラデッシュで過ごせたのは、多くの皆様に支えていただいたおかげです。この場をかりてお礼を申し上げます。現地で支えて下さった方々、日本から支えてくれた方々、そして、心配をかけた両親や家族に心から感謝いたします。ありがとうございました。